

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 仁平ふくみ

仁平ふくみ氏の博士論文「場所を書く——実在する場所・記録された出来事とファン・ルルフォの創作との関係の諸相」はメキシコの作家ファン・ルルフォの作品を丹念に分析しその創作の過程や意図を探った論文である。メキシコの地方を舞台に農民の語りを採り入れ、それによって国民的作家との揺るぎない評価を得たルルフォではあるが、そうした評価を得る過程を、とりわけ同世代の他の作家ファン・ホセ・アレオラと対比しながら歴史化し、ルルフォの意図は実はメキシコ（国民）を描くことにはなく、ある特定の地方（ハリスコ州の一部）を描くことにあったのだとして、定説を覆す新しい視点を提示している。また、そうした固有の土地への執着はスイスのCh-F・ラミュ、アイルランドのJ・M・シングらに共通する態度であり、むしろルルフォの普遍性を保証するものであるとして世界文学への視点を切り拓き、野心的である。

ルルフォの小説『ペドロ・パラモ』および短篇集『燃える平原』の諸短篇を分析するにあたって仁平氏は、アントニオ・テジョの年代記をひもといて源泉を探り、作家自身が書いた旅行記を参照してその年代記やジャーナリズムへの志向性を指摘し、キューバのA・カルペンティエールや同じハリスコ州の先輩作家A・ヤニェスらを引き合いに出して再文脈化を行い、未完の小説の草稿を検討して作家の根底にある傾向や強迫観念を探っている。その結果、一般に読者が描くであろうルルフォ像とは異なるルルフォの知的な側面が浮かび上がり、同時に、その位置づけも明確になった。

ルルフォ財団での資料の博搜を前提にした以上の仁平氏の研究手法とその成果は、審査でも高い評価を受けた。一方で、タイトルに言う「場所」に合わせるあまり、いささか強引に思われる箇所が散見されるとの批判もあった。また、援用した批評概念についての疑問も呈された。審査委員から発されるそれらの指摘や疑問に対して仁平氏は真摯に応答し、それらの指摘も全体の論旨に影響を及ぼすほどのものではないことを説明した。また、「場所」への執着というならば、G・ガルシア＝マルケスやM・バルガス＝リョサといったラテンアメリカ文学のブームの中心を担った作家たちとの比較も欲しかったところであるとか、写真家としてのルルフォの活動ももう少し考察すべきではなかったか、などの意見もあったが、それらはいずれも論文としての欠落というよりはその広がり期待するゆえの要望というほどのものであろう。

いずれにしろ、本邦初のまとまったファン・ルルフォ論にして同時にその世界的に見た研究史上も画期的なものである本論をもって、仁平ふくみ氏に博士（文学）の学位を授与するのが妥当であるとの意見で全審査委員は一致をした。